平成24年（2012年）7月
第9号

三重県

新県立博物館NEWS

編集・発行：三重県環境生活部新博物館整備推進プロジェクトチーム

ともに考え、活動し、成長する博物館にむけて

・「みえ マイ ミュージアム（MMM）プロジェクト」進行中！ ･･･P1
・好評！　館長出張講演会 ･･･P1
・基本展示室のみどころ紹介 ･･･P2～3
・新博のみっちゃん ･･･P2
・ただ今　調査研究と資料収集をしています ･･･P4～5
・新県立博物館には驚きがいっぱい博物館を歩いてみよう ･･･P6
・新県立博物館の建築工事の進捗と大型展示ケースの検討 ･･･P7
・ミュージアムフィールドの里山 ･･･P7
お知らせ ･･･P8

「みえ マイ ミュージアム（MMM）プロジェクト」進行中！

新県立博物館では、博物館づくりや開館以降のさまざまな場面へ県民・利用者の皆さんに自ら携わっていただくことで、「わたしの博物館」と親しみや思い入れを持っていただきたいと考え、「みえ マイ ミュージアムプロジェクト（以下MMMプロジェクト）」という取組を展開しています。

みりょく発信隊説明会の様子

現在、その第1弾として、“新県立博物館みりょく発信隊”の募集を行っています。これは、新県立博物館の魅力や楽しさを、口コミ、ブログ、ツイッターなどで伝えたり、お店や会社のエントランス等でポスターを貼るなど、日頃の活動や生活の中で自由に宣伝していただこうというもので、すでに80名を超える方々の登録をいただいています。

MMMプロジェクトは、今後もさまざまなメニューを用意してご案内していきます。皆さん一人ひとりにとって「私ならこれに参加したい」というものがきっと見つかるのではないかと思いますので、ぜひともご参加ください。

好評！　館長出張講演会

館長出張講演会は、その名のとおり、館長自らが各地に出向き講演を行う企画です。親しみやすく、地域の活動を支援する博物館になろうとしていることを広く知っていただくため、平成23年11月から実施しています。これまでに11回開催しており、現在も依頼を受け付けています。

新県立博物館の上手な使い方、博物館と地域社会とのつながりなど、申し込みされた方の要望に応じて話す内容を決めます。

これまでの講演では、ハンズオン展示の実施をして欲しい、日本語以外の言語を使う方やバリアフリーの観点から展示を考えて欲しい、郷土への愛着が持てるような活動を進めて欲しい、学校や観光施設などと組み合わせて来館者を呼び込むのが良いのではないかなどの意見が出されました。これらの意見は開館後の運営に活かしていきたいと考えています。

基本展示室のみどころ紹介

このページでは、基本展示室のさまざまなコーナーの
魅力をシリーズで紹介していきます。

東紀州・熊野灘の自然

赤道を西へ向かって流れる北太平洋海流に起源をもち、西日本以西の太平洋沿岸に暖かい気候をもたらす大きな要因となっている黒潮。東紀州の沿岸地域に生息する豊かな生きものは暖かな黒潮の流れによる恵みを受けています。このコーナーでは黒潮がもたらす豊かな海について紹介します。

東紀州・熊野灘地域

熊野灘とは、志摩半島の大王崎から和歌山県の潮岬にいたる紀伊半島東南部の海域をさします。この辺りの海岸は、複雑に入り組んだリアス式海岸が多く見られます。また、鬼ヶ城や獅子岩、楯ケ崎などの熊野酸性岩の海食・風食によってできた特徴ある海岸地形が随所に見られます。海跡湖も数多く見られます。海跡湖は海に砂礫（されき）が堆積して海から分離されてできた湖で、淡水や汽水のものがあります。さらに、熊野川から流されてきた砂礫が沿岸流によって堆積して長さ20数kmに及ぶ礫浜（七里御浜）が形成されています。

流れる黒潮

熊野灘沖を流れる黒潮は、フィリピンの東方海上から、台湾東部を流れ、北上する暖流です。本流は西南諸島に沿って北上し、九州、四国、紀伊半島沖を流れています。さらに、列島に沿って房総半島沖まで達し、北からの寒流と合流します。黒潮は、貧栄養で植物プランクトンが少ないために透明度が高く、周りより黒く見えることから黒潮と名付けられたとも言われています。

暖かな黒潮は、多くの熱帯性、亜熱帯性の生物の幼生を南から北へと運搬するため、熊野灘沿岸海域はこのような南方系要素をもった生物が豊かです。この海域がチョウチョウウオやサンゴなど、分布の北限となっている種類もあります。

底引き網漁船での水揚げ

生きものが豊かな海

熊野灘の沖の深海には栄養分の豊富な海水があり、風の影響を受けて海面にまで巻き上げられ、暖流の黒潮の影響を受けた暖かな沿岸水と混じります。そこでは魚の餌になるプランクトンが多く発生し、それを餌にする小魚も豊富です。アジやサバ、イワシ、イセエビ、イカ、マンボウ、アンコウ、エビなど、豊富な生物資源に恵まれています。また、マグロ、カツオなどの大型の回遊魚が黒潮に乗って北上し、沿岸地域はブリの格好の漁場ともなっています。そのため、釣り、延縄、刺し網、底引き、巻き網、定置網など、多くの漁法が発達し、港にはたくさんの水揚げがあります。

熊野灘沿岸には鯨類も多く、マッコウクジラをはじめ、20種類程の鯨類を見ることができます。熊野灘で鯨類は餌を充分にとり、休憩をしたり、子育てをしたりしています。

現在、私たちは底引き網漁船に乗せていただいたりして、魚類の調査をしています。これからも調査を続け、豊かな東紀州・熊野灘の自然を表現したいと思います。

（安藤信哉）

交流のかたち～人の交流

中世後期に始まった一般庶民の伊勢参詣は、平和な近世になって定着し、時には数百万人が押し寄せるおかげ参りも発生しました。全国から多くの人々が伊勢を訪れ、その賑わいの中でさまざまな交流がくりひろげられました。展示では、参宮とそれを支えた御師とよばれる人々に着目します。

伊勢参宮と御師

伊勢を目指す人々の動きを支えた存在が「御師」です。御師は神宮の下級神職で、最も多い時には、内宮前の宇治の町に271家、外宮前の山田の町に615家の御師がいました。御師はそれぞれ担当地域があり、各地に檀家を持っていました。

毎年御師の家来が檀家をめぐり、お札や伊勢の土産を持参し配りました。

逆に檀家が伊勢参りに来る際には、御師の屋敷に宿泊することとなります。御師屋敷では神楽奉納や、豪華な食事のおもてなしがありました。そして、御師の家来に先導され、内宮や外宮へ参り、朝熊岳や二見など周辺の名所をめぐりました。

こう記すと、御師の活動が際立ちますが、それだけでは大量の参宮客をもてなし満足させることはできません。御師のもてなしの裏には、内宮・外宮の存在はもちろん、御師邸で供される料理の材料などを生み出す伊勢志摩の自然、食材などを供給する巨大な地域市場の存在がありました。

展示の中心

本展示では、全国から集まる参宮客と御師の様子、そのバックボーンとなった宇治・山田の町の様子を描き出す予定です。

御師のうち最大の規模を誇ったのが、外宮の御師三日市太夫次郎です。明治期の記録によると全国の檀家に配ったお札は、37万7200体余り、北海道・東北地方に多数の檀家を有しました。

神楽の様子（三重県立博物館所蔵）

伊勢土産の一つ伊勢暦
（三重県立博物館所蔵）

丸岡邸調査の様子

三日市太夫はその屋敷の規模も大きく、総床面積は約800坪に及びました。この壮大な屋敷全体を、新県立博物館では30分の1程度の模型で復元し、人の交流の展示の中心に据える予定です。

模型の中

長旅を経た参宮客がくぐる御師の門と玄関、参宮客がくつろぐ客間、御師と対面する参宮客、参宮客が願人となって行われる神楽、参宮客を楽しませた食膳、そのために伊勢志摩の自然の幸があつめられ準備が行われるにぎやかな台所など、御師邸の内では様々なシーンが展開していたはずです。現在、このシーンを選び復元し、御師邸を活写すべく調査を進めています。

展示調査の現状

御師身分は明治維新で廃止され、御師の末裔は神宮の神楽の取次や旅宿業を行うものもいましたが次第にすたれ、三日市太夫をはじめとする御師邸もほとんど取り壊され、御師をかえりみる資料もばらばらになってしまいました。

今、一定規模で伊勢市内に残る屋敷は、丸岡宗太夫邸のみとなっています。現在、市民活動により丸岡邸整備が進められています。新博物館整備推進プロジェクトチームも協力し調査を進め、近世の食器類が確認されるなど成果が出ています。

他にも御師のご子孫宅や、伊勢市内の博物館、図書館、まちかど博物館へうかがい、御師の屋敷絵図や神楽の道具、神楽の額などを調査しています。今後ともよりよい展示を求めて、調査研究を進めていく予定です。

（太田光俊）

ただ今　調査研究と資料収集をしています

ツツジの含浸標本づくりに挑戦しています

鈴鹿山脈の主峰であり、観光地として親しまれている御在所山は花崗岩でできている山です。花崗岩地域では、岩場や砂礫のやせ地がつくられやすく、このような場所には、たくさんのツツジの仲間が生育しています。

御在所山周辺では地形や気候条件により、アカヤシオ、シロヤシオ、ホンシャクナゲ、アセビ、サラサドウダンなどいろいろなツツジを見ることができます。鈴鹿山脈の自然を紹介する展示にむけ、現在、これらツツジの含浸標本の製作を進めています。

含浸標本とは、実物に樹脂などを浸透させてつくる標本です。植物標本は“さく葉”（押し花）が一般的ですが、実際の姿を展示で再現するため、レプリカや模型ではなく国内の博物館でもあまり製作の例がない含浸標本に挑戦しています。

標本製作にあたっては、国定公園内での採取許可を受けた上で、御在所ロープウェイ等の協力により、開花時期に山に登り資料を採集しています。

その後、しおれる前に速やかに処理し、数週間以上の加工過程を経るなど、苦労しながらも展示資料制作を進めています。

（松本　功）

御在所山でのホンシャクナゲ採取状況

トサノミツバツツジの含浸標本の試作品

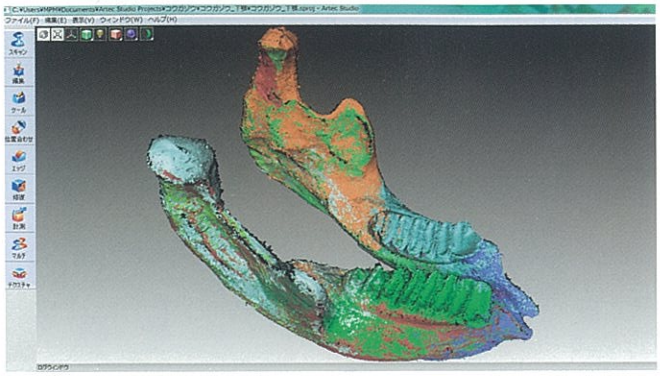
ミエゾウ全身骨格復元のための３次元スキャン

ミエゾウについては、その化石が三重県内（津市芸濃町）で最初に発見されたことから、世界中で通用する正式な学名は「*Stegodon miensis*（ステゴドン ミエンシス）」と命名されました。その後、県内各所から多数の化石が発見され、県立博物館では多くの化石資料を収蔵しています。ミエゾウは日本列島の自然や環境の歴史を解明するうえで重要なカギとなる存在ですが、未だ完全な全身骨格などの復元は行われていません。

そこで新県立博物館では、全身骨格を復元・展示をするため、現在、国内各地で発掘・保管されているミエゾウ化石の形態データの収集を行っています。今年の２月には、大分県宇佐市安心院（あじむ）から出たミエゾウ標本、さらに３月から４月にかけて、ミエゾウに近縁な中国産コウガゾウの骨格（県立博物館所蔵のレプリカ）について、３次元スキャナを使って、立体的なデータを収集する作業を行っています。

（中川良平）

３次元スキャンの様子



コウガゾウ下顎骨の３次元データ

伊賀地域の かんこ踊り調査

伊賀地方には、かんこ踊りという、雨乞いの祈願や祇園祭に際して災厄を祓う踊りが伝えられています。現在もかんこ踊りを継承している地域は数か所に限られていますが、そのうちの一つ、伊賀市川合（大江地区）の「羯鼓（かっこ）踊り」について、伊賀市の「かんこ踊り調査」の調査員の一人として、私、門口も平成23年度より調査をしています。大江の羯鼓踊りは、6人の踊り子が桜の花を模したオチヅイと呼ばれる飾りをつけて踊る、華やかな踊りです。毎年、4月20日に伊賀市馬場の陽夫多（やぶた）神社の春祭に際して奉納されますが、その前の休日に「大江羯鼓踊り保存会」の方々が集まり、当日用いる衣装や飾りなどの準備をします。私も準備を少し手伝いながら、大江の羯鼓踊りについて、いろいろと教えていただきました。踊りの奉納や準備を見学し、写真やビデオの記録をとることも欠かせませんが、地域の方々から直接お話を伺うことも大切なことです。大江のほか、現在は踊りが継承されていない大山田地域でも、年配の方々を訪ね、記憶にとどめられている、かつての踊りの様子について教えていただいています。

新県立博物館の基本展示では、山・盆地・平野・磯でそれぞれ育まれてきたくらしを紹介しますが、そのうち「盆地のくらし」のコーナーでは、伊賀盆地に焦点を当てて展示します。この地に継承されてきたかんこ踊りについても、伊賀の特徴的なほかの祭り・行事とともに、ビジュアルで紹介したいと考えています。

（門口実代）

飾りの準備

羯鼓踊りの奉納（陽夫多神社）

撮影快調！ 丸山千枚田

急な斜面に幾重にも連なる美しい田んぼ。ここ熊野市紀和町の丸山千枚田は、日本を代表する棚田のひとつです。千枚田の名前のとおり、約1340枚の田んぼが地域やオーナーの方々の手によって守られています。

さて、この千枚田は、ただ美しいだけではありません。そこには先人の知恵と技術が凝縮されています。急な斜面に平らな面を作るために用いられた石積みの技術に加えて、最も注目したいのは、「水配り」です。標高300メートルあたりから始まる棚田で心配されるのが、水の供給です。今から400年くらい前には、2240枚もあった田んぼ。この一枚一枚すべての田んぼに、山の上から順々にあまねく水を引き入れ、溜めていく仕組みは、後世に伝えたい技術です。

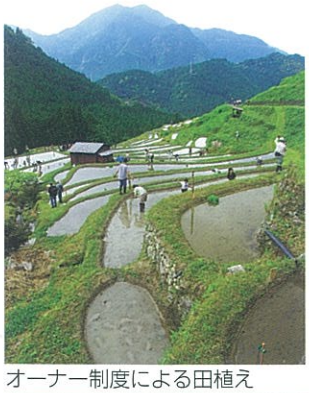
そこで、新県立博物館の基本展示室「山のくらしと自然」のコーナーでは、丸山千枚田に注目し、米作りの一年を、映像で紹介します。テーマは「水を配る」。撮影は、丸山千枚田保存会のみなさんにご協力をいただきながら、4月以降、田起こし、導水の様子、そして田植えと順調に進んでいます。虫送りや稲刈り、そして来年春の田起しと農作業はこれからも続いてきます。この循環する一年を稲作にとって最も大切な「水」とともに記録していきます。

でも撮影はお天気に左右されがちです。開館まで残された時間が少ない中でも季節はどんどん進んでいきますから、その時々を逃すことのないようこれからも頑張ります。

（宇河雅之）

代掻きの済んだ棚田

水の量の調整（撮影風景）



オーナー制度による田植え

湧き水も棚田へ流れる

田から田へ、畦越しの水

新県立博物館には驚きがいっぱい　博物館を歩いてみよう

このコーナーでは、新県立博物館の魅力ある空間、展示室、収蔵庫などをシリーズで紹介していきます

学習交流スペース

新県立博物館の建物は、エントランス、交流創造、展示、調査研究、収蔵、管理、機械室の7つのエリアで構成されています。

多くの方にとって、博物館と聞いて、まず思い浮かべる空間は、展示室だと思います。また、展示を見学して勉強する少し堅苦しい場所だとイメージする方も多いのではないでしょうか。

新県立博物館では、県民・利用者のみなさんにとって、もっと身近で日常的な場所となり、幅広く活用され、活動や交流の拠点となることをめざしています。

このために、施設の中核となる特色あるエリアとして設けたのが「交流創造エリア」です。

今回は、このエリアの中心空間である学習交流スペースをご紹介したいと思います。

ここは、三重の自然と歴史・文化に関する調べものをしたりグループで活動をしたり、博物館の面白さに触れてみたり、ゆっくりくつろいだりなど、思い思いの使いこなしをしていただけるよう、多彩なコーナーを設けています。

その入り口となるのがレファレンスカウンターです。利用案内や諸手続きの受け付けのほか、学芸員も待機していますので、気軽に質問や相談をしていただくことができます。

開架書架・情報コーナーには、三重の自然と歴史・文化に関する基本的な書籍や博物館資料の検索端末などがありますので、自由に調べものや学習に利用できます。

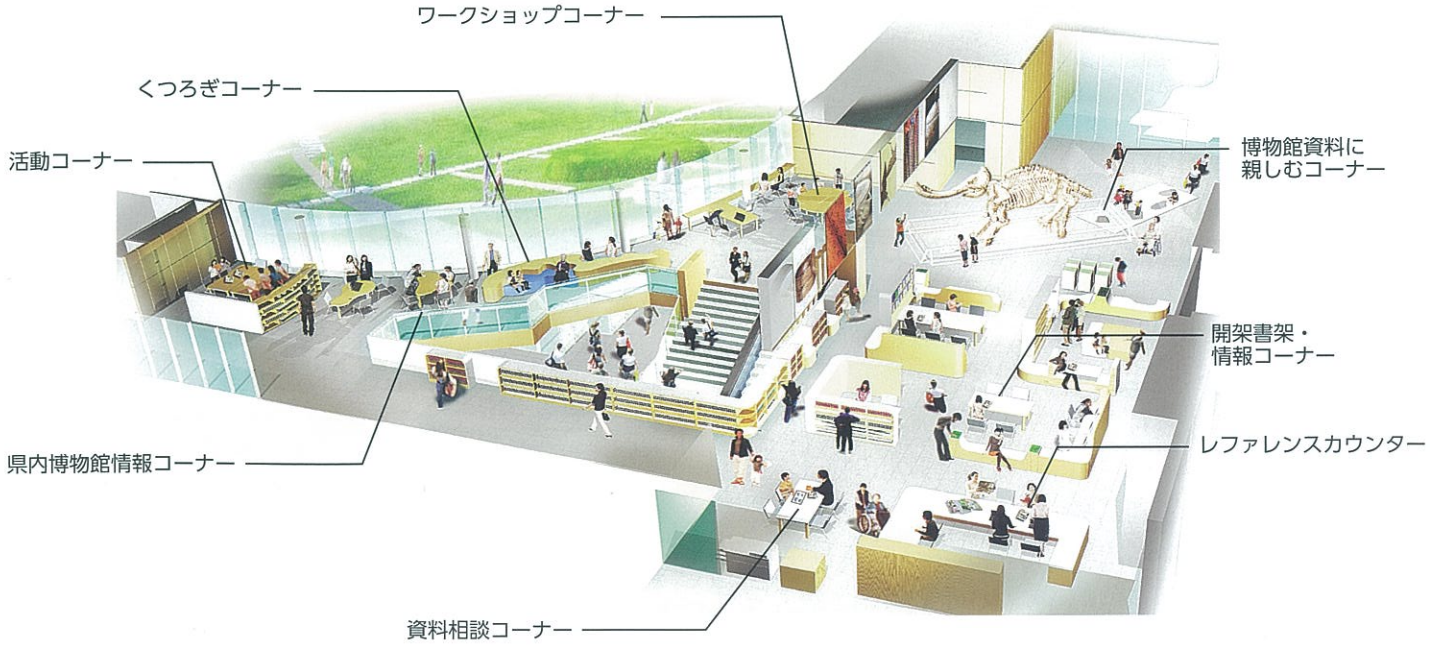
申請をすれば、書庫の中の本を出納して読むこともできますし、このスペースに隣接する「三重の実物図鑑ルーム」で基本資料をじっくりと鑑賞したり、資料閲覧室で収蔵資料を閲覧したりすることもできます。

また、仲間やグループで集まって、調べものや活動をしたい場合には、活動コーナーが活用できます。

博物館資料に親しむコーナーは、約300万年前に生息していたミエゾウの全身骨格復元模型をシンボル的に展示します（4ページで紹介してます）。ここを出発点にして、展示エリアで、三重の多様で豊かな自然と歴史・文化の世界に触れていただければと思います。

その他にも、県内外の博物館等の情報コーナーや里山林のあるミュージアムフィールドをガラス窓越しに臨むくつろぎコーナーなどもありますので、図書館のように日常的な場として多くのみなさんに活用していただければと思います。

（天野秀昭）



新県立博物館の建築工事の進捗と大型展示ケースの検討

新県立博物館の建築工事は、平成25年春の工事完了をめざして着々と進んでいます。躯体（くたい）工事については、平成24年6月に建物の躯体コンクリート打設が完了し、7月以降は正面階段などのエントランス部分へ着手する一方で、並行して収蔵庫内を始めとする内装工事や外装工事が本格的に進捗していきます。

平成24年（2012年）7月上旬の建築工事の状況

工事では、設計図だけでは判断できないものは実際のサンプルを用いて様々な検討をしながら進めていきます。企画テーマ展示室に設置する大型壁付展示ケースもその一つ。このケースは天井高6m以上、幅12m以上の大スケールで、日本国内でもなかなか目にすることができない最大級の展示ケースです。

この大型展示ケースの場合、実物大でモックアップ（模型）を製作し、設置予定の照明を用いて実際の照度分布や光の回り方、資料を置いたときの見え方について検証し、調整を行いました。

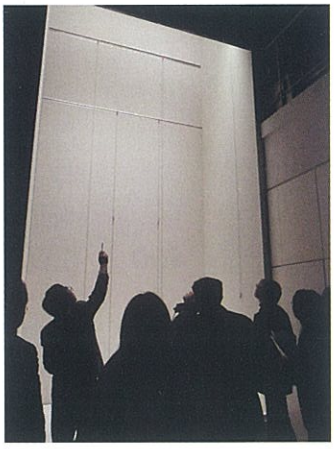
展示ケース内に設置されるケース用展示照明は、光源にＬＥＤを採用し環境負荷軽減をめざします。

ＬＥＤ照明のメリットは、省電力であることのほか、資料等の劣化の原因となる紫外線や赤外線の発生が極めて少ないことが挙げられます。

一方、光の拡散による均一な照度分布・自然な影の演出の工夫、色再現性の高いＬＥＤの採用、白色と電球色の併用による調色により、一般的に展示で使用する照明に比べてＬＥＤが劣る点を補完する検証も行いました。

開館後の企画展示では、この大型展示ケースによる大迫力の展示にどうぞご期待下さい。

（田畑　衛）



モックアップ検証の様子
幅2.5m×高6.14m（写真）及び幅2.5m×高4.8mのモックアップ2台を並べて検証

ミュージアムフィールドの里山

新しい県立博物館の敷地内には、津市街でも少なくなりつつある、里山環境が残されています。これまで管理されてこなかったため、モウソウチクなどが繁茂したヤブ山となっていました。

新県立博物館では、建設にあたり、地域の環境にふれる場所として、元の地形や植生を残しつつ、かつての里山環境の復元を試みています。利用者のみなさんとともに育み、活用する里山を目指して管理計画や活用方法の検討を進めています。

（松本　功）

モウソウチクが茂る建設工事以前の里山

林床のササ類を刈り取ったアベマキ林

お知らせ

三重県立博物館　平成 24 年度移動展示が開催中！

参加無料

タイトル
「海の恵みとにぎわい～英虞湾と熊野灘から～」

日　時　平成 24 年 7 月 25 日（水）～ 9 月 2 日（日）
休館日　毎週月曜日と 8 月 30 日（木）
場　所　志摩市歴史民俗資料館（志摩市役所磯部支所）
（志摩市磯部町迫間 878 － 9）

展示は１章から４章の構成となっています。
１章は英虞湾を支える森の役割と生きもの、２章は英虞湾の干潟の生きものと英虞湾の干潟の再生、３章はエビ網漁でとれる生きものとエビ網漁の営み、イセエビの資源管理、４章はクジラ類と昔の鯨漁の記録、クジラとともに外洋にすむ生きものについて紹介します。その他、こども体験コーナーもあります。

三重大学との連携シンポジウム

タイトル
「志摩の自然を活かす
～地域と大学と博物館の連携から～」

主　催　三重県、三重大学
日　時　平成 24 年 8 月 25 日（土）
13 時 30 分～ 16 時 30 分
会　場　志摩市磯部生涯学習センター多目的ホール
移動展会場の２階となります。
定　員　400 人（聴講無料、事前申し込み）

三重大学の木村清志さん、同大学木村妙子さんによる海の生き物に関する講演を皮切りに、地域の自然に関する取り組みや、学芸員による新県立博物館の自然の展示の概要報告を行い、総合討論を行います。

三重のくらしの写真募集　「三重のくらしの記録写真収集事業」

昨年度に引き続き、三重のくらしに関する写真の収集を行います。９月ごろから募集を開始します。また、県内５か所で写真収集への協力を呼びかける写真パネル展を開催する予定です。会場や日程につきましては、現在調整中で、今後、チラシ等でご案内します。

集まった写真は、新県立博物館の基本展示「くらしと自然」のコーナーで、県民の皆さんとともに進めた資料収集、展示づくりの成果として紹介する計画です。

多くの皆さんのご協力をお願いします。

同定会　「夏休みの宿題お助けプロジェクト！標本の名前を調べてみよう」

参加無料

日　時　平成 24 年 8 月 19 日（日）10:00 ～ 15:00
場　所　県立博物館レクチャールーム

身のまわりの生きものや石を見て、これって何だろうと思ったことはありませんか？今年もそんな標本の名前を専門の先生といっしょに調べる会が行われます。ぜひ、ご参加ください。

文化財探訪「城と街道のある町を訪ね歩く―桑名編―」

参加無料

日　時　平成 24 年 11 月 17 日（土）10:00 ～ 15:00（予定）
場　所　桑名駅周辺

本多忠勝の桑名城下を訪ね、東海道の道筋や寺院、桑名市博物館などを巡ります。三重県埋蔵文化センターとの共催事業です。

こども会議

参加無料

日　時　平成 24 年 11 月 4 日（日）　受付 13:00 開始　13:30 ～ 16:30（予定）
場　所　三重県総合文化センター大研修室（生涯学習センター棟４階）

お問い合わせ

三重県環境生活部新博物館
整備推進プロジェクトチーム

〒514-0006　三重県津市広明町 147-2
三重県立博物館内

TEL：059-228-2283（代表）
FAX：059-229-8310
E-mail　shinhaku@pref.mie.jp

新県立博物館の情報は、
ホームページでご覧いただけます。
http://www.pref.mie.lg.jp/SHINHAKU/HP/